佛教美術講座

如来と菩薩について（二）

仏像の種類

金子良運

仏像という言葉は本来の正しい意味では、正覚を成じて仏陀となったものの像、すなわち釈迦の像のことを指すのであるが、われわれは普通もっと広義に解釈して、釈迦から敷衍された如来はもちろんのこと、菩薩だとか天部だとか明王だとか、時には神将や僧形のものにいたるまで、いわゆる仏教の信仰の対象となっている彫像すべてを総括的にいっていることが多い。

ところで仏像の種類を教理に説かれている仏性と、それにともなう表現の類似によって、だいたい共通した尊別に分けて整理すると、ほぼ如来、菩薩、明王（忿怒）、天部、神将、比丘、居士、童子、力士、その他、など十種の形姿に分類することができる。その他というのを特に最後に加えたのは、例えば妙見菩薩のように、名称と姿は菩薩であっても、仏性は天部に属し、また四臂像は忿怒相であったり、青面金剛、歓喜天等数多い仏像の中では、一部にとうしても他の九つにあてはまらないものも出てくるからである。また立像と坐像とでは同じものでもその表現に多少異った場合のことや、更にここで区分する各種の仏像が、いずれの時代にでも信仰され拝されていたものかといえば決してそうでなく、そこにはおのずと時代の要求によってある時は現世利益的なもの、ある時期は来世的なものと尊別にも消長のあることも、併せて予め知っておかなければならない。

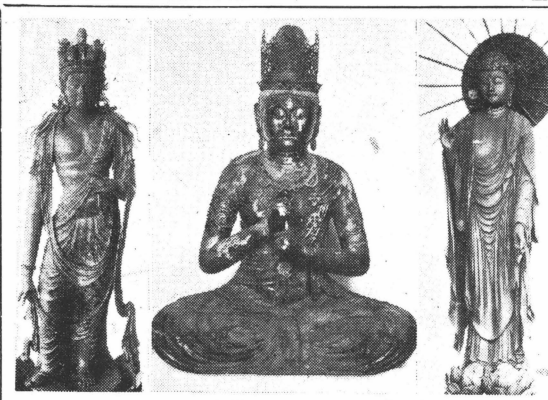
まず如来というのは、釈迦如来とか阿弥陀如来のように固有の尊名の下に如来とつくのがそれであって、いずれも最も高い仏格をもち、形の上ではいわゆる三十二相八十種好と称される表現上特色を具えているものである。三十二相といわれるものは、仏の心と体が常人と異っている点を数えたもので、要するに理想的な超人間的な体によって、仏性の偉大さを現そうとしたものであり、八十種好の方は更にそれを詳しく細分したものであるが、とても今ここでその一つ一つを説明することはできないから、それらの中で一目して如来とわかる二、三の特長だけを、簡単に記してみることにする。

即ち如来の頭部は頭頂に肉髻相と呼ばれる一段高くお椀を伏せたような隆起があり、髪は多く螺髪といわれる渦巻状で、眉間には白毫相という小さな突起があって、宝冠は戴いていない。しかも体には一切余計な装身具は着けず、着衣もわずかに衣と袈裟だけで指と指との間には網縵相と称される水掻様の薄膜があり、時としてその手の掌足の裏には法輪等が現わされていることもある。また手指はかならず固有の印を結んでいるなどで、前記の釈迦如来、阿弥陀如来のほか薬師如来、多宝如来、阿閦如来、宝生如来等がこの姿に属するが、薬師如来の左手に捧げる薬壷を除いては、全く同じ姿であるため、その区別は手の印相に頼るほかはない。ただ前回でもちょっと触れたように大日如来だけは例外で、如来といってもこの条件には適合せずに、頭髪も高々と髻に結び、きらびやかな装身具を飾り、宝冠を冠っている。仏教の教えを説いた釈迦の像と現世に利益をもたらす薬師如来は、各時代を通して造られているが、阿弥陀如来は特に藤原時代に入って、浄土思想の発達とともに盛んに造像されるようになり、大日如来は平安初期密教が伝えられてから以後見られるようになってくる。

菩薩形は、如来と同じく固有の名称の下に菩薩をつけて呼ばれる諸尊がこれに含まれるのだが、この各尊の仏性は、すべて将来仏果を成じて如来となるべき因位のものであるにもかかわらず、現在ではまだ上に菩提を求めつつ、下に衆生を済度しながら機の熟するのを待っていると説かれているため相好の一部には如来と同じ共通したいくつかの点があっても全体にはやはり前者とは画然とした相違があって混同されることはない。

菩薩形の外観から見た容姿の特色は、まず第一に相好は平静柔和で美しく、頭髪は結髪して宝冠を戴き、首には瓔珞をかけ手足に釧釵をつけ、着衣は衣裳の類はつけるが、如来のように厳密は用いず、俗に天衣と呼ばれる薄い帯状の綬帯を肩からまとっているものとある。その場合は更にその上を珞名飾っている例が多い。従って大体菩薩は貴族的な装身具を身につけた古代印度の王者の姿をかたどっているのが通例であって、その尊別の識別は主として手に持つ持物によって行われるが、それを持たない時は、自己の姿勢及び台座等によってその仏性を表示している。

即ち観音はかならず頭の正面に化仏をつけ、文殊菩薩が手に経巻と剣を執って獅子に坐し、弥勒菩薩は宝座に腰かけて思惟の姿をあらわしているなどはそれである。ただ地蔵菩薩は例外で、比丘形の姿で衣と袈裟をまとい、左手には宝珠を、右手は施無畏の印を結ぶか、あるいは錫杖をもち、一般の菩薩像とは全く異った姿で造られている。



左より十一面観音像・大日如来像・阿彌陀如来像

檀花

いつだか友の会の例会の時、陶器の話と茶道に小山さんが講師となったことがあった。講演が終って実技となると、講師の小山さんがすっかり陶工のいでたちでロクロを回し、見事な壺や皿に次々と作り上げて行く手並みのほどに、並居る友の会員は舌を巻いた。学者が陶工に早変りした秘密を知らない会員にとっては、無理もない話である。

小山さんは明治三十三年岡山県生れ、大正十二年東京商大予科三年を修了しただけで、商大を飛び出してしまった。それは小山さんの中にある一種の放浪癖のゆえである。蟹工船に乗ったという逸話や大陸各地を回ったのも、その本来の癖が出たものであろう。大正十四年から真清水蔵六翁の下で製陶法を修業、昭和二年には独立して窯業試験所の設立とともに編集主任となり、同十四年より十九年までの間、数回にわたり、朝鮮、満洲、北支の古窯址の調査、発掘に従事した。殊に陶器に対する眼を育てるようになったのも、彩蒲会の存在があずかって力あった。

昭和六年、東洋陶磁研究所の設立とともに編集主任となり、同十四年より十九年までの間、数回にわたり、朝鮮、満洲、北支の古窯址の調査、発掘に従事した。殊に陶器に対する眼を育てるようになったのも、彩蒲会の存在があずかって力あった。

昭和六年、東洋陶磁研究所の設立とともに編集主任となり、同十四年より十九年までの間、数回にわたり、朝鮮、満洲、北支の古窯址の調査、発掘に従事した。殊に陶器に対する眼を育てるようになったのも、彩蒲会の存在があずかって力あった。

小山富士夫氏のこと

美術史学界人物素描 ③

なったのである。小山さんがシナ陶器に打ちこんだのは、その王座をねらう結果になったが、その確固たる研究は『宋磁』を生み、小山さんの名はこの著書によってイギリスにまで知られることになった。

小山さんに接した人は、誰も皆その人当りのよさと明るさに好意をよせる。しかしその小山さんの底には、根強く自説をまげぬ強靭なもの、頑固なものがひそんでいる。たとえば修復発掘についての問題が出たときなどは、ずいぶん反対論をとなえた人もあったが、あくまでも自説をまげずに頑張の抜いた。

しかしそのような小山さんが、ケンカイで人を容れない魯山人氏とは仲がよいところなどは、どこに人なつっこい温かさがあるからであろう。ところが小山さんの作った陶器には、しっかりした筋の通ったきびしいものがある。硬軟その所を得たものというべきか。

庭球も野球もなかなか上手なスポーツマンである。現在、文化財保護委員会美術工芸課勤務、相変らず東洋古陶磁史の研究に余念がない。著書には『宋磁』『支那青磁名窯』『正倉院三彩』等数多く、また最近は『東洋古陶磁』『日本の陶器』等の全集の編集もされている。（XYZ）

【写真は小山富士夫氏】

「春香伝」と女詩人白信愛のこと

秋田雨雀

一九三八年（昭和一三）といえば、あの篤学な、そして天皇機関説によって失脚された美濃部達吉博士が、人民戦線の疑いで検挙される令息亮吉を身をもってかばいながら、

「私は亮吉が検挙という言葉で現される患難的な何かがあったとは、とうてい信ぜられません。私は同じ学徒として亮吉をだれよりもよく知っています！」

と叫んだ年であり、また、あれほど才能もあり、美しい容貌の所有者であり、また日本演劇文化の創造のためにほとんど寝食をわすれているように、周囲の人々に思われた二人の男女が、あれほど愛している祖国を足げにして、樺太半田沢の朝霧の中に姿を消した年でもあった。

あの三人の芸術家をその周囲に持っていたという理由で、私たち博士の国内での演劇運動がますます困難になって行くばかりであった。私たちはたびたび理論闘争をしたり、ファッショ的官憲に哀願的な声明を発したりした。そして、私たちの演劇行動は、古典演劇の研究再演のほかに道がないということになった。この時、一番最初に私たちのリパートリーに入って来たものは、朝鮮古典の「春香伝」であった。

幸い、このころ、朝鮮の作家張赫宙君（今は帰化して野口となっている）の新作「春香伝」が日本で出版されている時であるから、この作物を多才な村山知義が脚色して早速稽古に取りかかった。「鬼に金棒！」とだれもがおだてたものであった。それは朝鮮の古典を、朝鮮一の新作家が新作し、それを日本一の才人村山が演出するからというのであった。

実際「春香伝」は朝鮮最大の演劇であり、単に演劇としてばかりでなく、語り物として名高いものであった。一般にも知られているように、主人公李夢竜は青年官吏として、その美しい愛人の春香を助けて、政治改革を行うというのであるから、この不幸な、しかし、勝れた民族にとって民族英雄譚として伝えられているものであった。ある朝鮮の友人は「朝鮮では芝居は見るものではなく、食べるものですよ」と言ったことがあるが、「春香伝」は実に長く聞いたものであった。

朝鮮民族の食物であった。

私たちが「春香伝」をもって朝鮮に渡ったのは一九三六年の十一月であった。しかし、私たちは朝鮮にわたって一番先に投げつけられたのは、「鬼に金棒！」とだれもがおだてたものであった。それは朝鮮の古典を、朝鮮一の新作家が新作し、それを日本一の才人村山が演出するからというのであった。

実際「春香伝」は朝鮮最大の演劇であり、単に演劇としてばかりでなく、語り物として名高いものであった。一般にも知られているように、主人公李夢竜は青年官吏として、その美しい愛人の春香を助けて、政治改革を行うというのであるから、この不幸な、しかし、勝れた民族にとって民族英雄譚として伝えられているものであった。ある朝鮮の友人は「朝鮮では芝居は見るものではなく、食べるものですよ」と言ったことがあるが、「春香伝」は実に長く聞いたものであった。

朝鮮民族の食物であった。

私たちが「春香伝」をもって朝鮮に渡ったのは一九三六年の十一月であった。しかし、私たちは朝鮮にわたって一番先に投げつけられたのは、「民族文化」の問題であった。私個人から言っても、正直に言って、芝居の公演旅行などの問題ではなくなった。私たちは京城、平壌、大田、金州、群山、釜山、大邱の諸都市を歩いている内に、日本文化に影響した朝鮮上代文化――殊に日本に移植された奈良、「雅楽」の演奏を聞かされた時には、私たちは、少くも私は何も言えなくなってしまった。

女詩人白信愛（ペいしんえい）が大邱りんでの大きな籠を捧げて半月夜村（けんげつそん）のプラットホームを列車と一緒に歩いて来た時は、私たちは殆んど熱狂していた。

「白信愛（ペいしんえい）！白信愛！」

「さようなら！さようなら！」

紫のチョゴリと、純白のチマが長く私たちの瞳の中に残っていたが、この美しい朝鮮の女詩人は、間もなくガン腫を病んで若い生涯を終えたという報道を受けた。

（一九五四、二、一四）

奈良国立博物館

二月の陳列・漆工品

当麻寺・金珠院、熊野権現速玉神社・那木詩絵絵馬堂、同・松嶋螺鈿詩絵手箱、当麻寺・蒲池

特絵筆

武器・武具

春日大社・籠手、志都呂山神社・太刀（銀延吉）、誉田八幡宮・太刀（銘則国）

絵画

文化財保護委員会蔵・旧横川寺蔵浄土曼荼羅、当麻寺・土佐光茂筆当麻寺縁起絵巻、廻城寺・廻城寺境内古図

経巻文書

薬師寺・大般若経、談山神社・法華経、石山寺・玉篇残欠、興国寺・養度院勧行規式

京都国立博物館

友の会二月例会

第八回仏教美術講座

とき　二月十九日（土）午後一時半

映画「室町美術」を観る

斎藤清

ライトの濃淡をうまく駆使できたらもっと感情がでないでしょうか。

雪舟の山水長巻図は自然をみるより以上の迫力と自然を感じたのは、絵のうまさ、スミの濃淡の簡潔巻物であったことがフィルム的効果で無理がなかったのでしょう。古きものがあんなに新しく見られたのも驚異でした。あの場合も四季に応じ光と影といったライトの使い方を工夫したらもっと深くならないでしょうか。

（版画家）

○浅野晃

テンポが速すぎる感じです。もう少しゆっくり鑑賞できるようにと思います。せっかく能の舞台がでてくるのに能面の紹介があっさりしすぎていました。

山水長巻は印象的でした。三十三間堂の仏たちも。

（評論家）

○島崎清彦

取扱っている内容について云々する資格を持ちませんので、映画としての形について感じた点を申上げます。

この種の映画では殊に、扱っている対象そのものを、充分によく見せる事が一番大切で、各種のカメラ技巧など、あくまでも、そのための必要に応じただけのものでありたいと思います。しかし実際には、作る人たちの、いわゆる「映画的構成」のために、技巧のための技巧に堕ちることが往々あります。

その点で、この映画は、実に素直に、平易に作られていて、大変結構だと思いました。今後も、この方向と形で浜山の美術映画を生んで頂きたいと希望します。

ただ、画面の長さと細部描写が少し不足しているために「充分よく」見られない憾も、若干あるように、感じられました。絵画でいえば、題材・構図・調子・筆触といったものが、常に、できるだけ詳しく示されてほしいと思います。

（映画評論家）

○奥田直栄

判りやすい解説と画題のスーパータイトルは、良い映画として大変好ましい試みでした。

又今までに拝見した美術映画に較べて映画的な要素がより強く感ぜられ飽かずに見ることが出来ました。

水墨画の多くが生きたものになっていたのもガメラアングルと編集のうまさによるものでしょう。室町時代と現代をつなぐ狂言や能も全体に適当な変化と面白味を感じています。

ただ煎板の音などはもう少し原音に近かったらと思われます。

（根津美術館員）

○富永次郎

博物館製作の美術映画はどれも興味深く見ています。今回の「室町美術」中では何といっても雪舟の「山水長巻」が圧巻。作品の性質からいって、移動による接写がよく効果を上げ、なまなましい現実感を与えます。時代別による作品を終ったら、次には一寺、一画家というように主題をしぼって製作されることを希望します。（作家）

MUSEUM　2月号

▽芦屋釜と天明釜・蔵田蔵▽武将と陣羽織・日野西資孝▽新国宝紹介（平治物語絵詞・風神雷神像・短刀銘来国光・能作生塔）▽文化財としての民家・稲垣栄三▽富貴寺大堂・矢島恭介▽グラフ・城▽その他

定価160円・〒8　申込本館会計課・美術出版社